残したい想いと風景

清見地域

おっぱら夢組合

Oppara yume kumiai

語り手　小谷秋藏
聞き手　山本真紀
企画:高山市
取材日:令和2年11月30日

小谷秋藏
昭和23年10月12日生

ここらの山はホームグラウンド

昭和38年に中学を卒業した後、1年だけ山の仕事の勉強に行き、その後16歳からずっと山に入ってやっていました。途中23歳から7年間、アマゴとイワナの養殖を専門にやって、また魚の養殖をやりながら30歳頃から山仕事に戻りました。それから65歳まで森林組合で働きました。大原小学校が廃校になり「おっぱら自然体験センター」になる前から、「自然案内人」や森林組合の「グリーンパイロット」をやっていました。その他には、平成6年頃からパスカル清見のホテルのお客さんを連れて自然散策に行ったり、「森の大使」っていう女の子達のグループを教えていました。

市町村合併を機にこの自然体験センターをなんとか活用できんかっていう話で、大原町内会の全住人が会員の組織を作っていろんな活動を始めました。余所から来た人も巻き込んだ5人の役員で、「この地域が活性化するには、やっぱり、いろんな『夢』を持っとかないかん」ってことで、「おっぱら夢組合」っていう名前にしました。「おっぱら」は漢字にすると読みにくいもんですから、平仮名の「おっぱら」にしました。平成17年に立ち上げて今もやっとります。

春は、こういう山地ですから、「山菜狩り」などの自然散策がメインです。植物は小さいうちから大好きで、独学で勉強しました。私は昔人間で、欲張りなもんですから「食べれて、見れて、薬になる」そういう植物の勉強をしたんです。まず、大原地区の食べれる植物、きれいな植物、珍しい植物の勉強をしました。この地域には草から木まで含めて800種類以上の植物がありますが、その90パーセントくらいまでの植物を覚えました。その知識を活かして、約70種類の「山菜狩り」のメニュー表を作っとります。

メインは、夏です。やっぱりお客さんが多いですからね。夏は、ほとんどが川遊びです。7月20日前後から9月10日頃までは川の活動が中心です。まず、ライフジャケットを着て川を流れる。この清流は馬瀬川っていうのですけど、すごくきれいな川で、泳いだり流れたりできます。私が間伐材で作った筏に子ども達が乗ったりもします。だいたい、ひと夏に8組から9組くらいは、私の養殖した魚を使った「魚掴み」をして河原で焼いて食べます。

せせらぎ街道の紅葉は有名です。秋は、そういう紅葉を観ながら散策をします。ここを立ち上げるまでは、キノコを採って、山の中でキノコ鍋をやりました。キノコは1種類ずつ袋に分けて入れ、毒があるかどうか判定してから鍋に入れます。参加者は、ほとんど余所の大人の方でした。

大原小学校の遠足はもともとは歩いて行ったが、だんだんバスに乗っ

プロフィール

＜学歴＞
昭和38年　清見中学校卒業
昭和39年　岐阜県緑化促進青年隊終了

＜職歴＞
昭和39年　木材会社就職
昭和46年　大原養魚場経営をはじめる
昭和58年　清見村森林組合（のちに飛騨高山森林組合）に就職
平成26年　飛騨高山森林組合退職

＜役職＞
清見村子ども会会長
大野郡子ども会会長
清見青年育成委員
清見村教育委員
一般社団法人おっぱら夢組合理事長

©2020高山市デジタルアーカイブ

て遠い所に行くようになった。私はそういうのは嫌やもんで、せっかく目の前に山があるんやでな。「じゃー、私が案内人やってやるで」って言って、『近くて遠い遠足』というタイトルで、自然案内をやりました。ある時は急な山、ある時は沢を登って行く。いつも事前にコースは考えとく。散策でもなんでも始めは誰でも手と足を使えば登れる急なとこ。下りはなだらかなとこ。魚を獲ったり、山菜を採ったりして、天ぷらにして食べる。そうすると子ども達もある程度山菜の種類を覚えますで、もしかすると大人よりも山を知っとったかもしれんね。

平成12年頃から清見保育園も弁当持って山の散策をやっておりました。年長さんはだいたい4キロくらい歩きます。中間点でおにぎりを食べ、あとは子ども達が「さるなし」を採って食べたり、私が木に登って「山葡萄」を採ってやったり。まあ、秋は、こういう感じです。

ここは標高が810メートル。冬は、まあまあ、けっこう雪が降ります。センター横の広場で野菜コンテナを使って、エスキモーのかまくらみたいな「イグルー」を作ります。みんなで雪の上にパターンと倒れて、雪の上に自分の体のかたちをつける。これは街の人たちがすごい感動されます。センターの裏山には4万本くらいピンクのカタクリが咲く斜面があって、我々が子どもの頃は、ここをスキー乗り場にしとった。ここにコース作って、肥料袋を使った「尻すべり」をやります。

そして、冬遊びのメインは、向かいの山まで「和かんじき」での雪山歩き。頂上まで2時間くらいかけて「和かんじき」で歩き、頂上で塩だけのおにぎりを食べる。頂上からセンターが見えるので、みんなで「ヤッホー」をして、また同じ道を帰るんですけど、同じ道だとつまらんじゃん。で、ナラとかクリとか朴の木の天然林の間に私が尻でコースを作る。危ないもんですから20～30メートルごとで、コースを一旦ストップ。また、ずらしてコースを作り、順番につないだのを子ども達が「尻すべり」で下っていきます。子ども達はこれを一番、楽しむかな。

センターができる前は、標高1500メートルを登って降りてくるネイチャースキーもやっとりました。今の人はスキーっていえばスキー場に行く。だからスキーは上手だけど、体力がないね。

山の散策

和かんじき

一般社団法人化へ

パスカル清見さんがやっていたキャンプ場が、ずっと閉鎖して休んでいました。それを我々が高山市から指定管理を受けて、7年ぐらいになります。立ち上げた当初は、スタッフの給料も出ないくらいでした。キャンプブームのおかげで、ここ3年ほど5割増し5割増しでお客さんが入ってきて、今は始めた当初の売り上げの2倍半くらい。初めてキャンプを体験する方もみえるので、昨年、1セット20万円くらいするキャンプ道具を3セットくらい買った。そうやって持ち物の財産にして、少しずつ増やしてやっとるとこ。

ただ、この通りコロナで今年のゴールデンウイークは、今まで約100万円あった売り上げが0円になってしまいました。再開したら、今度は7

©2020高山市デジタルアーカイブ

月の長雨。キャンプ場は開いていたけど人数が少ない。やっと8月になって晴れてから、お客さんは毎日のようにいらっしゃった。それから11月の三連休まで、土曜日は全部埋まった。それでなんとか、ふたりの職員の今年度の給料は確保できました。

今年の4月から「任意団体」から法人格をとって「一般社団法人」になりました。また、運が悪くて、もし1年早く「一般社団法人」でやっとれば、給付金などでコロナ禍でのスタッフのいろいろな補償ができたんやけど、「法人」としての前年の実績がないもんで、保障はありませんでした。おっぱら自然体験センターはもうぜんぜん売り上げがなく、利用されとるのは例年の5分の1くらいかな。でも、まあ、キャンプ場を運営しとったおかげで乗りきれました。

売り上げが伸びてきたので、法人化してないと社会的信用が得られないでしょ。法人化している方が国からのいろんな補助金を受けやすいでしょ。ただ、法人化すると、職員達の毎月の給料や社会保険とかそういうので、年間にけっこうなお金がかかる。その代わり職員には、厚生年金などの保障がしっかりでき、安心して長く勤めてもらえるでしょ。

気球

新しい風　～気球と砂金採り～

三重県の気球業者に大きな気球を持って来てもらい、パスカル清見で気球に乗るイベントを初めて行いました。その後、うちのセンター長が栃木県で気球の操縦免許を取得して、中古の気球を購入し、自前で熱気球の体験ができるようにしました。それから、3年前には新品のロシア製の気球とオーストラリア製のバスケットも購入しました。

「せっかくやで高山の子ども達を気球に乗せてやりたい。校庭で気球に乗って自分の校下を上から見せてやりたい」と思い、その時の教育長のところまで行って、「是非、学校で熱気球の体験をやりましょう」と言ったんですけど、スポーツ関係などの予約が入っていて高山市内のグラウンドは常にいっぱいで空いていないの。それで、なかなか場所がとれなくてね。で、たまたまうちの孫が森下町に住んでいて、大原から出た先生が山王小学校の教頭をやっとったもんで、「ちょっとお前んとこの学校で気球を上げさせてよ」って、その教頭のとこにお願いに行ったら、ちゃんと校長の許可が出ました。気球は20キロのガスボンベが、30分で無くなるくらいガスを使う。ガスバーナーのゴォーっていうすごい音がするで、クレームにならんように上げる前に近くの町内会長に挨拶にも行きました。

令和2年の10月7日に、清見中学校の1、2年生が校庭で気球に乗りました。途中、風が出てきて14人が乗れなかった。その後、その子らのために別の日にもう1回気球を上げて、やっと全員が乗れました。11月2日には、清見小学校で気球を上げました。しまいにちょっとつらい風が出てきたんやけど全校児童が乗れました。だいたい1回に5人ずつ乗って、運よく100人くらい乗れました。本当に気球は天候に影響を受けやすくて飛ばすのが難しい。そこで、センター長は、毎日風の観測をしてデータ

砂金取り

©2020高山市デジタルアーカイブ

化して、科学的に分析をしてます。

体験メニューの中で、「砂金採り体験」は１４年くらい前から行っています。大原は古く鎌倉時代から砂金を採っていました。今までに砂金採り全国大会を6回やって、それをきっかけに40半ばの男性がこの地域に住むようになった。

私は常に「こういう田舎やで何もできないとかやらないとかじゃなくて、こういう田舎だからこそ、田舎でできることをフル活用してやることが地域の活性になる」と思っとるんです。どこの地域にもいえることなんだけど、人口が減っても増えることは、なかなか。でも、まあ、「余所の地域に無いものをこういう風に取り入れることも大事かな」と。

魚掴み

自然体験の仕掛人

清見保育園の年長さんのお泊り保育の時、生きたままの魚を運んで築山のところで「魚掴み」をする。園児も刃物を使ってお腹を取り串打ちまでやり、命の大切さを教えた。魚を炭火で焼く合間に、胡桃で笛を作ったり石に絵を描く。子ども達は独創性がすごいからね。私が仕掛け人であって、子ども達に習っとるんやね。これは15年くらい続いているかな。

清見の小学校の子ども達がセカンドスクールで体験に来たんですよ。子ども達は、気球の勉強をしたり、砂金採りの勉強をして、1日過ごす。で、せっかく来てくれたし、あんまりお金もないって話で、自分で握った塩おにぎりを持っていく代わりに、ただで魚の塩焼きを食わせる。その子ども達は、私が清見保育園で関わった子ども達やもんで、魚の食べ方を覚えていて喜んで頭から全部食べます。

私は子ども会育成会の役員を14年くらいやって、その後、清見村の教育委員もやらしてもらいました。子ども会の時に教えた子がお母さんになって、その子どもがまた、私に習っておる。孫みたいなひ孫みたいな感じ。

セカンドスクールに来た清見小学校の子らに「大原に来たことある人」って聞いたら、手を挙げたのは2人か3人くらい。やっぱり清見の中でも一番はずれで、こっちに来る機会があんまりない。高山の人達、まあ、清見もそうやけど、我々と話しとっても、ちょっと感覚が違う。

高山の人達も清見の人達も、大原を向こうから見ると「奥」っていう。我々は高山の方を「奥」っていう。まあ、高山の人達は「下の方」っていうと「富山」の方をイメージするが、ここで「下」っていうと「岐阜、名古屋」ですよ。ここから高速道路で岐阜まで1時間で行けますから。うちの娘も名古屋に嫁いどるけど、名古屋から1時間20分で来るで。逆に高山市内まで45分ほどかかる。実際、うちの体験のお客さんも名古屋のお客さんが多いし、大阪とか京都とか関西方面もいるね。

©2020高山市デジタルアーカイブ

清見地域 おっぱら夢組合
Oppara yume kumiai

大原の現状と可能性　～来る人に助けてもらう～

この地域の景観ですが、どうですか。あんまり草が茫々としてないでしょ。草刈りや周囲の環境の整備を、牛飼いの人も含めたこの地域の者がやっとるんですよ。これをどうやって継続、維持していくかだね。

昨年から地域貢献と景観保全として、独居老人や女性だけの家から「草を刈ってくれ」って頼まれてやるようになった。でも、受けてやっている我々もいいくらいの年やで、そう何年もやれん。じゃー、どうするかってことで、今、ちょっと模索中です。

物を収穫するなら喜んで来ても「草刈り体験」に来たい人は、まず、おらん。で、今、草刈りロボットの購入なんか考え始めたが、いい草刈りロボットだと200万円から300万円はするな。

今、活性化のことも含めて、一番に考えておるのは、この地域で収穫できるものを特産品として、摘み取り体験も含めてお客さんに提供することだな。スノーボードのインストラクターをやっとる彼は、夏、ホウレンソウの手伝いしながら7,000本くらいトウモロコシを作っとる。他にもブルーベリーに菌床しいたけをやっとる人がおる。で、その菌床しいたけの栽培をやっとる経営者は、ビニールハウスを使って果樹園をやっとる。こういう山の中のビニールハウスで葡萄や林檎を作ったりしている。私の魚もそうやし、そういうのから地域の特産品みたいなもんができる。それで、いろんなお客さんを誘致していけばどうだろうな。

私は物事に対して前向きなので、「やりたい」って言えば「いいよ」って言う。若者達に「気」があればいくらでも応援します。まあ、本人達は「我々は、余所者」とか言うけど、私はそんな気はないです。住んだらこの地域の住民なんやで、この地域の人なんや。地域から出てく人は出てく人で、もう勝手に出ていくんやで。

入ってくる人を我々は歓迎する。そういう方式でやっとるもんで。まあ、そういう中で、若者達がいろんなことを提案してくれば、応援するけど、なかなか、やっぱり、こんだけの地域でいろんなことをやるのは、なかなか難しい。ここのセンター長は広島から来とるし、キャンプ場の管理人は愛知なんです。もうひとり役員でインストラクターをやっとる子は千葉の方から来ている。

筏乗り

自然を守る、自然と生きる

自然保護のため、私は「ヒメボタル」と「ゲンジボタル」を自然に戻したり、復活させたりもしてます。「ゲンジボタル」を増やすために、「カワニナ」もすごいたくさん育てた。実は「カワニナ」がおっても蛍が来ない場所がある。泥だけではなく小石もないと蛍は来ない。泥だけで「カワニナ」の住んでいるとこは「オニヤンマ」。「ヤゴ」は肉食で「カワニナ」を食べる。

「ゲンジボタル」のいる沼地は、もともとうちの田んぼで、そこに昔「ドジョウ」がいたでなと思って、その用水路の泥を上げたら、そこに「ドジョウ」がまんだ、けっこう残っとった。あと、ビオトープも持っ

©2020高山市デジタルアーカイブ

清見地域 おっぱら夢組合
Oppara yume kumiai

とるんですよ。そこで「バイカモ」っていう植物を育ててね。それも全部、私がやらしてもらっとる。

5年くらい前かな、川で魚が釣れないもんだから釣り客人口が減りました。私も小っちゃいうちから釣りが好きなんですが、釣りを止めたの。魚が減ってまうもんで。で、3年前から天然のアマゴの卵を取ってきて、それを育てて川に放流しとる。実は、今年アマゴがすごい増えてきて、釣り客も普通の倍くらい増えた。

今年はコロナの影響で養殖の魚も売れない。前の年から魚の準備をしとるけど売れないから、春に稚魚を4,000匹、夏過ぎに親になるやつを何百匹と川へ放流。雄と雌を一緒に放流すると、産卵する。来年の春にはきっと、すごいたくさん魚が出て来るでしょうね。

その他に山仕事を教えたりもする。愛知県の一宮に木曽川の源流を守ろうっていう「どんぐりクラブ」があって。その人たちが1年に5、6回来たかな。トチの苗植えや下刈り、枝打ち、間伐まで全部教えたりした。ただ、最近は年をとったもんで、みんなでまとまっては来なくなったが、今も名残で何人か来る。川遊びだけなら1年に2～3回は来るか。2日間に分けて、40人くらいずつ来る。今やっとるスタッフでなんとかもてなすけど、これを将来、伝承していくのはどうかな。

私は子どもから年寄りまで好きやもんで、まだ、じいちゃんやばあちゃんのとこへも、たまに遊びに行ったりするんや。人口を増やすとか地域を無くさないようにって、住む人となると、なかなか難しいです。忙しくても興味があるかないかやね。いろんなことを一生懸命やるんやけど、なかなか。まあ、人口流出じゃなくて年寄りが死んでしまうもんで、その分だけ毎年、人口は増えない。高齢化はどこの地域も一緒です。

今から将来やってくれるリーダーを育てていかないと。そのへんが難しいかな。今あるメニューに適応する人材不足もあるな。別にどっから来ようがいいんですけどね。日本の人でなくてもいいし。こういう所に住んでもらって、そういうのを引き受けて、地元の人達と一緒になってこの地域を守ってくれる。そういうのをもっともっと、私は求めている。

これは、どこの地域でもそうでしょうけど、こういう田舎だから来る人を拒まず、来る人に助けてもらう。そういう姿勢を持っていないと共存できないと思う。私は自然が無くならないようにこのふるさとを守りたい。

おっぱら自然体験センター

©2020高山市デジタルアーカイブ